

プラネクス邸の謎の円柱

1985年から1986年にかけて、フランスのパリで「ラ・ヴィレット公園」計画のベルナール・チュミ事務所に参加した。その前年に日本で行われた筑波科学博覧会（国際科学技術博覧会）を記念してフランス政府が日本の建築家に向けて行った、PAN JAPAN（Plan Architecture Nouveau JAPAN）設計競技の賞品としてのフランス研修であった。大学院の博士課程の最終年で、論文をまとめるより設計競技にのめり込んでいた頃であった。ラ・ヴィレット公園のコンペティションはベルナール・チュミ、レム・コールハースという20世紀の最終期の建築をリードする建築家のデビューでもあった。恐らくこの2人の案ほど、世界中の同時代の建築家たちに衝撃を与えた案はないのではないだろうか。マシンエイジからコンピューターエイジの建築への驚異的革新が提示された。私は、まだ1つの建築も実現したことのないコンピューターエイジの理論的建築家の事務所で研修スタッフとなった。予期せぬ出来事のパログラミングとしての空間設計が、ラ・ヴィレット公園で実現しつつあった。

PAN設計競技の審査員の1人の都市計画家が現場事務所にやってきた。彼はル・コルビュジエの設計した「プラネクス邸」（1924）の1階の右部分に住んでいた。自宅に招待してくれるという。予期せぬ人と予期せぬ建築との出会いである。以前から『ル・コルビュジエ作品集』[*] 第1巻145ページ右下に掲載されている室内写真で、気になることがあった。1階の右部分に不思議な楕円の柱のようなものが、思いがけない位置にあるのだ。訪れてみると、なんと3階の下水配管が1、2階の右のスタジオ部分の中を突き抜けている。しかも斜めの配管はまるで不思議な柱頭のように垂直の楕円柱に取りついている。予期せぬ機能の予期せぬ出会いを、空間を形づくるデイテールにしている。ル・コルビュジエがなぜこのような空間処理をしたのか、既に永遠の謎であった。*



上—プラネクス邸 外観
下—プラネクス邸 1階内観

[*] 『ル・コルビュジエ全作品集 第1巻-第8巻』ウィリー・ボジガー編、吉阪隆正訳（A.D.A. EDITA Tokyo 1979）

おかがわ みつぐ—広島大学大学院 助教授・建築家／1953年生まれ。1986年、東京工業大学大学院博士課程退学。1985～86年、パリ ベルナール・チュミ事務所（バルク・デ・ラ・ヴィレット）。1986～99年、パラディサス一級建築士事務所。1999年より現職。
主な作品：尾道の家（1990）、ドミノ1990's（1994）、向島洋ランセンター展示棟（1995）、向島プリズムパヴィリオン（1998）、広島大学工学部コミュニケーションガレリア（2001）など。

